

幼児期・児童期初期における自己知覚の発達と精神的健康との関連

清泉女学院大学 眞榮城 和 美

The relation between developments of self-perception for young children and mental-health.

Seisen Jogakuin college MAESHIRO, Kazumi

要 約

本研究は、幼児期・児童期初期における自己知覚の発達と精神的健康との関連について明らかにすることを目的としている。子どもの自己知覚尺度として、Harter & Pike (1984) の尺度に準拠した日本語版「自己有能感と社会的受容感測定尺度」(眞榮城, 2010)を用い、幼児期・児童期初期の自己知覚と精神的健康との関連について検討した。調査対象者は N 県に住む幼稚園児 93 名(男児 39 名・女児 54 名・平均年齢 4.66 歳)とその保護者(平均年齢 36.25 歳)および担任教師 6 名、児童期前期版は、N 県に住む小学 1・2 年生 56 名(男児 27 名・女児 29 名・平均年齢 7.12 歳)とその保護者(平均年齢 37.69 歳)および担任教師 9 名であった。結果、幼児期・児童期初期における自己有能感と精神的健康(本研究では問題行動)に関連が認められ、自己有能感が高いと問題行動が少ない傾向が示唆された。

【キー・ワード】 幼児期, 児童期, 自己有能感, 社会的受容感, 精神的健康

Abstract

This study is intended to clarify the relationship between self-perception and mental health in young children. Interviews of children in The Pictorial Scale of Perceived Competence and Social Acceptance for Young Children (Harter & Pike, 1984) using the Japanese version (Maeshiro, 2010).

Participants were 93 kindergarten children (54 girls and 39 boys mean age 4.66 years) and their parents (mean age 36.25 years) and six teachers, 56 elementary school students living in two years (average age 27 girls and 29 boys 7.12 years) and their parents (mean age 37.69 years) and nine teachers. As a result, early childhood behavior problems were due to the low self-competence.

【Key words】 Young Children, Perceived Competence, Social Acceptance, Mental-health

目 的

幼児期から児童期初期の子どもの自己感の発達研究は 1980 年代以降盛んになってきており、行動をおこす力として、あるいは行動の特徴をつくりだす源として乳幼児期の自己の機能に関する研究に取り組むことの重要性が指摘されている(柏木, 1983)。Wellman (1990)は、3 歳頃になると自己と他者は外部からは立ち入ってわからないそれぞれが独自の心的状態をもった主体として意識されるようになると指摘しており、自分の体験した事象を自己の過去体験として語る自伝的記憶が 3 歳から 4 歳頃に確立することは多くの研究によって確認されている(たとえば Nelson, 1993)。このように、3 歳以降であれば自分自身の感情や態度などの内的状態を知覚すること、つまり「自己知覚」について測定することがある程度可能になるものと考えられる。しかしながら、幼児期や児童期初期における自己知覚に関する知見は、児童期中期以降の子どもの対象とした研究にくらべると乏しい状況であることが指摘されている(戸田, 2008)。その理由として、自己記入式質問紙での調査が可能となる年齢以前の子どもたちへの自己知覚研究を実施することのむずかしさが挙げられる。この問題点を解決するツールとして Harter&Pike(1984)は、乳幼児期および児童期初期における自己知覚が測定可能な The Pictorial Scale of Perceived Competence and Social Acceptance for Young Children (以下 PSPCSA と表記)を開発している。このツールは、幼児期および児童期初期における自己知覚を、知的能力面や運動能力面に関する「自己有能感」と仲間からの受容や母親からの受容といった「社会的受容感」の 2 側面で捉えている。幼い調査対象児の興味関心を持続させるために、単なる面接調査ではなく絵を用いて調査を実施している点が特徴であり、子どもが抱く自己有能感や社会的受容感を捉えることが可能なことから、子どもの自己感の発達に関心を持つ多くの研究者により用いられている(例えば、Jambunathan, 2000; Mantzicopoulos, 2006)。本邦においても桜井・杉原(1985)が Harter&Pike (1984)の尺度に準拠した「幼児の有能感と社会的受容感測定尺度」を作成し、高い信頼性を確認している。しかしながら、桜井・杉原(1985)の尺度には Harter&Pike(1984)により作成されている項目とは異なる設問項目が含まれていることや、調査対象者が幼稚園年長児のみであるため調査対象者の幅を広げる必要があること、調査の妥当性について検討がなされていないなどの課題が挙げられている(桜井・杉原, 1985)。そこで眞榮城(2010)は、Harter の許可を得て、日本語版 PSPCSA の構造確認を行った。その結果、日本語版においても幼児版・児童期初期版ともに原尺度(Harter&Pike, 1984)と同様の自己有能感・社会的受容感の 2 因子構造であることが確認された。また、眞榮城(2010)は、調査対象者として、3 歳以上ではなく 4 歳以上を対象とすることが尺度の信頼性と妥当性を高めると指摘しているが、PSPCSA を用いることにより、これまで検討される機会が少なかった幼児期および児童期初期の自己知覚について把握することが可能になるものと考えられる。

子どもの自己感の発達に影響を及ぼす要因については、親の養育態度との関連を検討した研究が数多く認められ、親が子どもの意見を尊重する態度が子どもの自尊感情を高めること(眞榮城・藤森・八木下・菅原・北村, 2001)などが指摘されている。子どものアタッチメント理論から自己の発達について見解を述べている臼井(2008)は、「アタッチメントの質が他者との相互交渉を通じて自己を

どう捉え、どのように形成するかに大きな方向づけを与える」と述べている。つまり、子どもの自己感の発達に影響を及ぼす要因として、親側の要因だけではなく、子ども側の要因や親子の相互作用にも注目した視点の重要性が指摘されている(眞榮城, 2005)ものと考えられる。幼児期・児童期初期における自己感の発達過程については、多くの子どもたちが家庭外での集団生活を開始する中で、子どもたち自身が他者との比較を行うことや親や教師の期待を意識し、自己に取り込むことが指摘されている(Marsh, Craven, & Debus, 1998)。また、自己感の健康的な発達や安定性が精神的健康と深いかわりを持っていることは多くの研究により明らかにされていることである。柏木(1983)の指摘にもある通り、子どもの自己知覚の機能について検討することは、人間の行動の源を探る研究として重要な役割を担っているものと考えられる。

そこで本研究では、PSPCSA 日本語版(眞榮城, 2010)を用い、次の3点について検討することとした。①幼児期・児童期初期における自己知覚と親認知・教師認知親の関連を検討し、自己知覚の発達に関わる親・教師の視点について考察する。②幼児期・児童期初期における自己知覚と親の養育態度との関連を検討し、子どもの自己知覚の発達に影響を及ぼす親の養育態度について考察する。③幼児期・児童期初期における精神的健康(本研究においては子どもの問題行動)に影響を及ぼす自己知覚の機能について検討する。

方法

調査対象者および調査時期 調査対象者はN県に住む幼稚園児93名(男児39名・女児54名・平均年齢4.66歳)とその保護者(平均年齢36.25歳)および担任教師6名、児童期初期版は、N県に住む小学1・2年生56名(男児27名・女児29名・平均年齢7.12歳)とその保護者(平均年齢37.69歳)および担任教師9名であった。幼児・児童に対する調査方法は面接調査であり、調査時期は2009年4月から2010年3月であった。調査時には倫理面に配慮し、事前に幼稚園および小学校で配布した質問紙に対して保護者からの回答と面接調査への同意が得られた対象児のみに面接調査を実施した。

調査内容 自己知覚に関する調査内容：幼児版 The Pictorial scale of perceived competence and social acceptance for preschooler and kindergartener (Harter&Pike, 1984)・児童期初期版 The Pictorial scale of perceived competence and social acceptance for first and second graders (Harter&Pike, 1984)を日本語に翻訳し使用した。翻訳に関しては日本語を母国語とし英語圏にて心理学の博士号を取得した者にバックトランスレーションを依頼した。設問項目は幼児版・児童期初期版ともに「知的能力」「運動能力」の自己有能感に関する2つの下位尺度と「友人からの受容」「母親からの受容」の社会的受容に関する2つの下位尺度の計4尺度から構成されている。本尺度の特徴として次の3点が挙げられる。①対象児が興味を持続しやすいように絵を用いている。②就学前と就学後では有能感に影響を及ぼす要因が異なることを配慮し、幼児版と児童期初期版の2版に分けられている。③絵を見たときに対象児が主人公に同一化しやすいように、主人公の性別のみが異なる男児版と女児版が作成されている。回答方法は、2段階4件法(第1段階目では2種類の絵のうち、自分に似ていると思われる絵を1つ選択、第2段階目では絵が自分に似ている程度を“よく似ている”ま

たは“少し似ている”の内から1つ選択する方式)であり、各設問で評価の高い反応から 4, 3, 2, 1点と得点化した。

子どもの精神的健康度に関する調査内容：保護者・幼稚園教諭・小学校教諭を対象とし、質問紙調査を行った。調査内容は、子どもの問題行動に関する内容 (SDQ: the Strengths and Difficulties Questionnaire, Goodman, 1997, Sugawara, Sakai, Sugiura, Matsumoto, 2006) の日本語版 25 項目であった。SDQ は、情緒的不安定さ・問題行為・多動/不注意・仲間関係の持てなさ・向社会的行動の少なさの 5 側面について測定する構造になっている。回答方法は、“あてはまる”“まああてはまる”“あてはまらない”の 3 件法を用いた。

親の養育態度に関する調査内容：保護者に対する調査用紙では親の過干渉・温かい養育態度について問う PBI(Parental Bonding Instrument; Parker ら 1979)の日本語版 (成田ら, 1998) 25 項目を用いた。回答方法はあてはまる 4 からあてはまらない 1 までの 4 件法を用いた。

結 果

子どもの自己知覚の得点 (性差の検討・親/教師得点との比較検討) 幼児期・児童期初期それぞれの自己有能感・社会的受容感得点を算出し、性差について t 検定を行った。その結果、幼児期では自己有能感において女兒の得点 (M=3.66, SD=.40) が男児の得点 (M=3.43, SD=.39) よりも高いことが認められた (t(91)=2.75, p<.01)。社会的受容感については性差が認められなかった。児童期初期については自己有能感・社会的受容感ともに性差は認められなかった (表 1 参照)。次に、子どもの自己知覚と親評定・教師評定の得点差について検討するため、対応のある t 検定を行った。その結果、幼児期における自己有能感は子ども評価より親・教師評定が有意に低い得点を示していたことが認められた [親評定 t(64)=12.67, p<.01; 教師評定 t(89)=27.89, p<.01, 表 2 参照]。また、社会的受容感については子ども評価より教師評定が有意に低い得点を示していた [t(89)=5.56, p<.01, 表 2 参照] 児童期初期における自己有能感についても、子どもの評価より教師評定が有意に低い得点を示していた [教師評定 t(45)=2.96, p<.01, 表 2 参照]。

表 1 自己有能感・社会的受容感得点 (性差の検討)

		幼児期			児童期初期		
		M	SD	t 値(df)	M	SD	t 値(df)
自己有能感	男児	3.43	.39		3.24	.47	
	女兒	3.66	.40	2.75** (91)	3.18	.60	.46 (53)
社会的受容感	男児	3.18	.54		2.68	.51	
	女兒	3.26	.54	.72 (91)	2.92	.45	1.82 (53)

**p<.01

表 2 自己有能感・社会的受容感得点（親・教師評定との差）

		幼児期			児童期初期		
		M	SD	t 値(df)	M	SD	t 値(df)
自己有能感	本人	3.57	.39		3.21	.55	
	親	2.67	.39	12.67**(64)	3.21	.60	.02
	教師	1.74	.53	27.89**(89)	2.94	.58	2.96(45)**
社会的受容感	本人	3.20	.58		2.81	.50	
	親	3.10	.42	1.12(64)	3.01	.56	1.88
	教師	2.60	.80	5.56**(89)	2.78	.54	.05

**p<.01

子どもの自己知覚と親評定・教師評定との関連 子どもの自己知覚の2側面である「自己有能感」・「社会的受容感」について、子ども評定・親評定・教師評定の関連性が認められるかについて相関分析を行った。その結果、幼児版においては、子どもの自己有能感・社会的受容感と親評定・教師評定の間に有意な相関は認められなかった。児童期初期版においては、子どもの自己有能感と親評定・教師評定の間に有意な正の相関が認められた（子-親間 $r=.31$, $p<.05$; 子-教師間 $r=.47$, $p<.01$; 表 3 参照）。社会的受容感は、親評定との間には有意な相関が認められなかったが、教師評定との間には有意な正の相関が認められた（ $r=.40$, $p<.01$; 表 3 参照）。

表 3 子どもの自己知覚評定者間相関

	幼児期の子ども評定		児童期初期の子ども評定	
	自己有能感	社会的受容感	自己有能感	社会的受容感
親評定	.01	.04	.31*	.08
教師評定	.20	.17	.47*	.40*

*p<.05

子どもの自己知覚と親の養育態度との関連 子どもの自己知覚の2側面である「自己有能感」・「社会的受容感」について、親の過干渉な養育態度・親の温かい養育態度との関連について相関分析を行った。その結果、幼児版においては、因子レベルでの相関は認められなかったが、子どもの社会的受容感項目の中の「仲間に受容されている」感覚と母親の温かい養育態度との間に正の相関（ $r=.27$, $p<.01$ ）、母親の過干渉との間に負の相関（ $r=-.27$, $p<.01$ ）が認められた。一方、児童期初期版においては、親の養育態度と自己有能感との間には有意な関係性が認められなかったが、親の温かい養育態度と子どもの社会的受容感との間には正の相関が認められた（ $r=.30$, $p<.05$; 表 4 参照）。

表 4 子どもの自己知覚と親の養育態度との関連

	幼児期の子ども評定		児童期初期の子ども評定	
	自己有能感	社会的受容感	自己有能感	社会的受容感
温かい	n. s.	n. s.	n. s.	.30*
過干渉	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.

* $p < .05$

子どもの自己知覚と問題行動との関連 子どもの自己知覚の機能について検討するため、子どもの自己知覚と親および教師により評定された子どもの問題行動（SDQ:情緒的不安定さ・問題行為の多さ・多動/不注意傾向・仲間関係の持てなさ・向社会性の低さ）の得点との関連性について検討した。相関分析の結果、幼児期版においては、自己有能感と親評定による SDQ トータル得点との間に負の相関傾向が認められた ($r = -.23, p < .10$; 表 5 参照)。親および教師によって情緒不安定な傾向が高いと認識されていることと子どもの自己有能感との間に負の相関が認められた(親評定 $r = -.41$, 教師評定 $r = -.32, p < .01$; 表 4 参照)。また、親および教師によって向社会性が低いと認識されていることと子どもの自己有能感との間に負の相関が認められた(親評定 $r = -.32, p < .01$ 教師評定 $r = -.26, p < .05$; 表 5 参照)。前述の結果をもとに、親認知による子どもの問題行動得点 (SDQ 得点トータル) を目的変数とし、子どもの自己有能感と社会的受容感を説明変数とした重回帰分析を行った(強制投入法)。その結果、親が認知している子どもの問題行動得点に対して子どもの自己知覚は有意な影響を及ぼしていないことが確認された($R^2 = .05, n.s.$)。

児童期初期版においては、自己有能感と親評定による SDQ トータル得点との間に負の相関が認められた ($r = -.33, p < .01$; 表 5 参照)。また、自己有能感と親および教師によって問題行為が多いと認識されていることとの間に負の相関が認められた(親評定 $r = -.31, p < .05$, 教師評定 $r = -.30, p < .05$; 表 5 参照)。さらに、自己有能感と親および教師によって多動/不注意傾向があると認識されていることとの間にも負の相関が認められた(親評定 $r = -.33, p < .01$, 教師評定 $r = -.27, p < .05$; 表 5 参照)。社会的受容感との間には親および教師によって仲間関係の持てなさについて認識されていることとの間に負の相関が認められた(親評定 $r = -.28, p < .05$, 教師評定 $r = -.31, p < .05$; 表 5 参照)。前述の結果をもとに、親認知による子どもの問題行動得点 (SDQ 得点トータル) を目的変数とし、子どもの自己有能感と社会的受容感を説明変数とした重回帰分析を行った(強制投入法)。その結果、親が認知している子どもの問題行動得点に子どもの自己有能感が負の影響を及ぼしていることが認められた(自己有能感 $\beta = -.39, p < .01; R^2 = .14, p < .001$; 図 1 参照)。

表 5 子どもの自己知覚と親認知による問題行動との関連

親評定	幼児期の子ども評定		児童期初期の子ども評定	
SDQ	自己有能感	社会的受容感	自己有能感	社会的受容感
SDQ トータル	-.23+	n. s.	-.33**	n. s.
情緒不安定	-.41**	n. s.	n. s.	n. s.
問題行為	n. s.	n. s.	-.31*	n. s.
多動・不注意	n. s.	n. s.	-.33**	n. s.
仲間関係のも てなさ	n. s.	n. s.	n. s.	-.28*
向社会性の 低さ	-.32**	n. s.	n. s.	n. s.

+p<.10, *p<.05, **p<.01

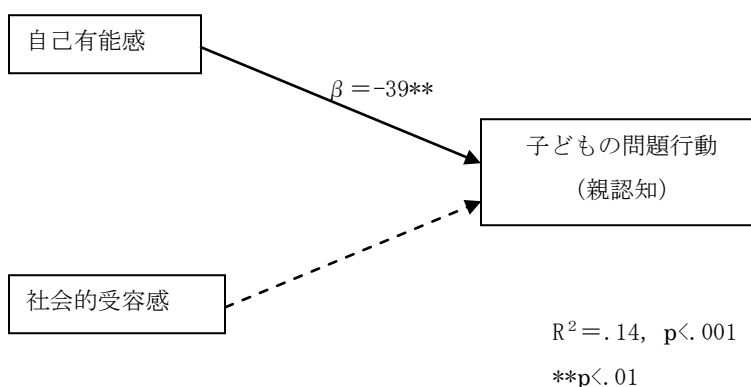


図 1 児童期初期における自己知覚の機能
(問題行動に影響を及ぼす自己知覚の検討モデル)

考 察

本研究では、PSPCSA 日本語版 (眞榮城, 2010) を用い、①幼児期・児童期初期における自己知覚と親認知・教師認知親の関連、②幼児期・児童期初期における自己知覚と親の養育態度との関連、③幼児期・児童期初期における精神的健康(本研究においては子どもの問題行動)に影響を及ぼす自己知覚の機能について検討した。

①幼児期・児童期初期における自己知覚と親・教師認知との関連については、幼児期・児童期初期ともに、子どもの自己知覚と教師評定の関連の強さが認められた。特に児童期初期においては、自己有能感・社会的受容感の2側面とも教師評価と中程度の相関を示していたことから、本研究において

も、Marsh, Craven, & Debus(1998)が指摘していたように、子どもたちが親や教師の期待を意識することによって自己知覚を発達させている可能性が示唆されたものと考えられる。また、子どもの自身の評価と親・教師評定との差を検討した結果から、幼児期においては親や教師よりも子ども自身の評価が高く示されており、特に教師評定と子どもの自己知覚の差が顕著であったが、児童期初期になると親や教師との得点差が少なくなっていることから、発達にともない子ども自身が他者との関係性の中で自己を相対的に評価している傾向が明らかになったものと考えられる。

②子どもの自己知覚と親の養育態度との関連については、児童期初期において親の温かい養育態度と子どもの社会的受容感との関連が認められた。この結果から、親自身が温かい養育態度で子どもに接していると認識できていることは、子どもが親から受け入れられているという感覚や友だちから受け入れられているという感覚を発達させる際に重要な役割を果たしているものと考えられる。アタッチメントの質が他者との相互交渉を通じて自己をどう捉え、どのように形成するかに大きな方向づけを与える(臼井, 2008)と指摘されているように、児童期初期にある子どもは、親の温かい養育態度を自己に取り込み、他者との関係性を信頼できるものとして、また、自分自身が他者からの信頼を得るに値する存在として認識できるようになる可能性が示唆されたものと思われる。

③幼児期・児童期初期における精神的健康(本研究においては子どもの問題行動)に影響を及ぼす自己知覚の機能については、自己有能感と親評定による子どもの問題行動との間に関連が認められ、特に、児童期初期においては、問題行動を高める要因として自己有能感の低さが影響していることが明らかになった。この結果から、幼児期・児童期初期において、自己有能感が高いこと(計算が得意である、先生によくほめられるなど自分の知的な側面に自信があることや、走ることが得意である、縄跳びが上手であるなど運動能力に自信があること)は、情緒の安定や適応的行動選択が可能になるといった精神的健康を維持する際の重要な役割を果たしていることが実証されたものと言えよう。

本研究は横断的調査であり、幼児期から児童期初期の自己知覚の発達と機能について解明するためには、縦断的研究を行う必要がある。近年話題になることが多い小1プロブレムなどの移行期にかかわる問題理解や問題解決に役立つ知見を得るためには、移行時に精神的健康状態が悪化しないための自己知覚の発達と機能について、多様な要因を考慮した研究デザインによる検討が求められているものと考えられる。特に、自己知覚や自尊感情の発達に影響を及ぼす要因については、遺伝要因と環境要因との相互作用について検討している行動遺伝学研究(例えば McGuire, Manke, Saudino, Reiss, Hetherington&Plomin, 1999;Kamakura, Ando&Ono, 2007)により、環境要因だけではなく遺伝要因が自己感の安定性を導く一要因であることが示唆されている。これらの知見を視野に入れ、今後は幼児期・児童期初期における自己知覚の発達について、環境要因のみならず遺伝要因も考慮し、具体的にどのような環境要因が子どもの自己知覚の発達に影響を及ぼしているのか、また、子どもの自己知覚が精神的健康にどのような機能を果たしているのかについて明らかにしていきたいと考えている。

引用文献

- Goodman R (1997) The Strengths and Difficulties Questionnaire: A Research Note. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 38, 581-586.
- Harter, S. & Pike, R.(1984).The Pictorial Scale of Perceived Competence and Social Acceptance for Young Children. Child Development,55, 1969-1982.
- Jambunathan, S.(2000).Gender Comparisons in the Perception of Self-Competence Among Four-Year-Old Children. The Journal of Genetic Psychology, 161(4), 469-477.
- Kamakura,T.,Ando,J.,&Ono, Y.(2007) Genetic and environmental effects of stability and change in self-esteem during adolescence.Personality and Individual Differences,42,181-190.
- 柏木恵子(1983) 子どもの自己の発達, 東京大学出版会
- 眞榮城和美・藤森秀子・八木下暁子・菅原ますみ・北村俊則(2001) 児童期における自己評価と親子相互作用—「意見尊重的態度」に関する分析から, 性格心理学研究 第10巻, 第1号, p58-59.
- 眞榮城和美(2005) 自己評価に関する発達心理学的研究—児童期から青年期までの検討—風間書房.
- 眞榮城和美(2010) 幼児期・児童期前期における自己知覚の構造検討, パーソナリティ心理学会第19回大会, 慶応義塾大学大学, 発表抄録
- Mantzicopoulos, P.(2006).Younger Children's Changing Self-Concepts:Boys and Girls From Preschool Through Second Grade. The Journal of Genetic Psychology, 167(3), 289-308.
- Marsh,H.W.,Craven,R.,&Debus,R.(1998) Structure, stability and development of young children's self-concepts: A Multicohort, multioccasion study. Child Development,69,1030-1053.
- McGuire,S.,Manke,B.,Saudino,K.J.,Reiss,D.,Hetherington,M.E.,&Plomin,R.(1999) Perceived competence and self-worth during adolescence:A longitudinal behavioral genetic study.Child Development,70,1283-1296.
- Nelson,K.(1993) The psychological and social origins of autobiographical memory.Psychological Science,4 7-14.
- 桜井茂男・杉原一昭.(1985). 幼児の有能感と社会的受容感の測定. 教育心理学研究. 33, 237-242.
- Sugawara, Sakai, Sugiura, Matsumoto, (2006) SDQ:The Strengths and Difficulties Questionnaire <http://www.sdqinfo.com/>
- 戸田まり(2008) 第10章 児童期における自己の発達, 榎本博明・岡田努・下斗米淳 監修 自己心理学② 生涯発達心理学へのアプローチ, p175-189, 金子書房
- 臼井博(2008) 第2章アタッチメントからみた自己の発達, 榎本博明・岡田努・下斗米淳 監修 自己心理学② 生涯発達心理学へのアプローチ, p27-41, 金子書房
- Wellman,H.M(1990) The child's theory of mind.Cambridge,MA:MIT Press.

謝 辞

本研究の調査にご参加くださいました園児のみなさん，小学生のみなさん，保護者のみなさま，先生方，ご協力本当にありがとうございました。この場をおかりして心より御礼申し上げます。